

令和7年度 文京区議会

子ども・子育て支援調査特別委員会 視察報告書



りばあさいど原宿前にて

視察概要

1 視察日時

令和7年12月19日(金) 午後1時30分～午後3時30分

2 視察先

Seamless Support Labs 原宿
(渋谷区神宮前三丁目18番33号 りばあさいど原宿内)

3 視察目的

医療的ケア児を含めた障害児にとっての各ライフステージを切れ目なく支援する施設についての調査研究

4 視察参加者

委員長	田中 としかね
副委員長	宮野 ゆみこ
理事	高山 かずひろ
理事	田中 香澄
理事	沢田 けいじ
理事	小林 れい子
理事	金子 てるよし
理事	白石 英行
委員	松平 雄一郎
委員	名取 顕一
委員	関川 けさ子
同行	木内 恵美(教育センター 所長)
随行	佐久間 康一(区議会事務局長)
随行	杉山 大樹(区議会事務局議事調査主査)
随行	平尾 和香(区議会事務局議事調査担当)

視察内容

1 視察先対応者

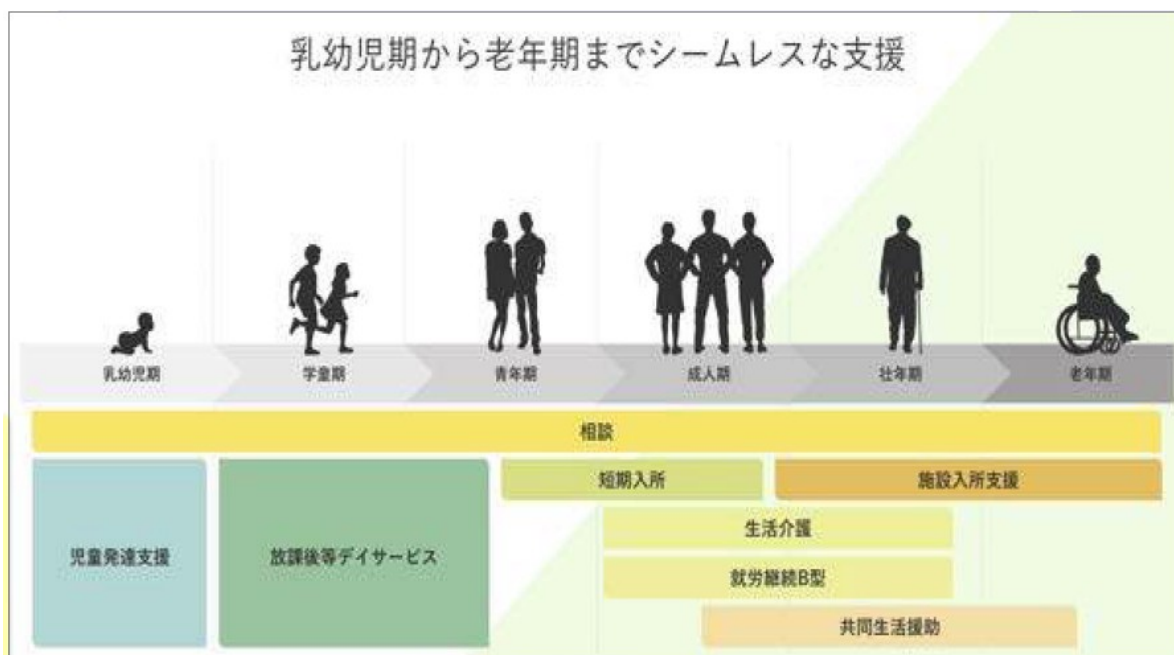
りばあさいど原宿 施設長 森下 氏
渋谷区 障がい者福祉課長 小林 氏

左から 森下氏、小林氏



2 取り組み内容

Seamless Support Labs 原宿では、未就学期、学齢期、青年期、中年期、高齢期と各ライフステージの課題を次のステージに持ち越すことのないよう、各ステージの切れ目のない(Seamless)支援(Support)を目指し、医療的ケア児を含めた知的・身体に障害のある方を中心に、通所事業・入所事業・相談事業のサービスを展開している。



(1) 児童分野

児童発達支援・居宅訪問型児童発達支援

保育士・児童指導員・看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の介入のもとプログラムを実施している。

居宅訪問型児童発達支援では、専門職(保育士・看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士)が自宅を訪問し、ご本人に必要なあそび(発達支援)やからだの取り組み(リハビリ)等の個別プログラムを提供。また、通所・就学へのスムーズな移行を見据え、本人の状態や体調に合わせて訪問と通所を組み合わせながら支援を行っている。

放課後等デイサービス

未就学期に引き続き、それぞれの目標や活動内容に応じて年齢や状態像でグループを作り、保育士・児童指導員・看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士の介入のもとプログラムを実施している。

(2) 成人分野

生活介護(重度心身障害者通所事業)

Café「D&I」での仕事や創作作業・畑作業などで『はたらく』ことの充実及び障害者理解の促進を図りながら社会参加を実施している。また、事業所周辺の地域資源を活用し、インクルーシブル教育の一環として、隣接する保育園の子ども達との交流も行っている。

機能訓練にプラスし、楽しみながら身体を動かす環境を設定するため、デジリハの活用、脳の活性化・情緒の安定・コミュニケーション能力の向上を促すため、専属の音楽療法士による音楽療法の実施、リラクゼーションを目的にスヌーズレンも活用している。



スヌーズレン

自立訓練(機能訓練)

地域でより良く、継続的に暮らしていくため、PT・OT・ST が関わり、目標を立てて訓練(練習)を実施している。

(3) 医療的ケア

治療行為としての医療行為とは区別して、経管栄養・吸引・呼吸管理などの日常生活に必要な医療的な生活援助行為を「医療的ケア」と呼び、支援員・看護師・療法士が連携して医療的ケアがあることで活動を制限することなく過ごせるように支援している。また、施設内にクリニックが併設されており、利用者の体調不良や発作などに対応できるよう神経科などの専門の医師が常駐している。

(4) その他

プール

施設の4階に25mの温水プールが設置されており、体が冷えないよう室内、水温は30度程度と温かく設定されている。個別の課題に合わせて水中の浮力を利用した全身運動プログラム、立て訓練(練習)を実施。

重度心身障害者の方々は活動範囲の制限や筋緊張が強いため、身体の回復とリラックスをさせてあげたいという思いで設置された。



25m プール

主な質疑応答

Q：重症心身障がい者児（医療的ケアを含む）を受け入れるための設備や工夫、また合理的配慮について。

A：医療的ケア児や車椅子利用者は、天井を見て過ごすことの多いため、利用者が楽しく過ごせるよう天井に工夫をしている。また、トイレ、遊戯室などすべての部屋を広くしている。



様々に工夫された天井



機械浴前の脱衣所

Q：就労を通じた工賃の向上は、どのように実現されるのか。

A：施設内に併設したカフェを運営しており、一般の方も利用することができる。カフェでは、生活介護の利用者がスタッフとして働いており、工賃は現在、月1万円ほど支給している。

カフェ「D&I原宿」

車椅子を利用される方、重度障害の方、一般の方と誰もが音楽と会話を楽しむことができるカフェを運営。数量限定の日替わりメニューとして生活介護の利用者と同じ食事を提供している。



「D&I原宿Instagramより

Q：児童発達支援、放課後デイサービス、生活介護、自立訓練それぞれに1日当たりの定員がありますが、受け入れ人数の総数としては何人ぐらいになるのか。

A：約30名の方が利用されている。本施設では、医療的ケアが必要な方、重度の方など車椅子を利用されている方が多い。

Q：障がい児を抱える家族を支える支援や仕組みについて。

また、家族は親なき後（高齢化も含む）のことを心配していますが、どのような生活設計を提案され、支援を提供されるのか。

A：本法人は、西東京市と大田区の方にはグループホームがあり、日中生活介護で過ごされた後、グループホームに戻られるという生活が実現できている。また、江東区にある入所施設と生活介護との連携もできている。

しかし、生まれ育った地域で過ごしてほしいというリクエストが多く、渋谷区に関して言うと、土地の確保、入所施設が少ないというのが現状であり、どう解消するかが課題になっている。

地域で生まれ育ち、その後地域で過ごせるおうち（グループホームや入所施設）を作ることをコンセプトに、理事長主催で年に数回ご家族との勉強会を開いている。

視察の感想

「制度」ではなく「場」と「運営」による支援の連続性

田中 としかね 委員長

「制度」では年齢や所管によって支援対象の分断を起こすことがある。それは進学や成人を機に支援が途切れるという問題につながる。

ではどうするか。

複数の福祉サービスを同一拠点に集約して、利用者・家族・職員の関係や情報が物理的に途切れない「場」を形成すること。さらに「運営」を、制度単位ではなく本人と家族の人生を軸に編み直すこと。

それは支援をつなぐ〈編集権〉を現場が持つということでもあるのだろう。「シームレスサポート」とはその謂いである。

また、カフェやクリニックを併設して、福祉を「特別な(閉じた)場所」ではなく、地域の中に「開いて」いる点も重要である。支援を受ける人と地域住民が自然に交差する構造は、共生を理念にとどめず、日常的な関係として成立させるのだろう。

世代・地域・人を繋ぐ「シームレス」な福祉の実現

宮野 ゆみこ 副委員長

渋谷区の「シームレスサポートラボ原宿」を視察しました。本施設は、医療的ケア児から成人期までを一貫して支える、先進的な福祉モデルです。

特筆すべきは「境界のない設計」です。原宿の街に溶け込むカフェでは障害のある方が主体的に働き、高い工賃を実現しています。隣接する保育園と共用の園庭で育った野菜をカフェで活用するなど、自然な形でのインクルーシブ教育も実践されていました。

また、利用者の視点に立った細やかな配慮が印象的でした。車椅子の方が仰向けで過ごす時間を考慮した遊び心ある天井デザインや、障害者アートをあしらった表札、心身を解放する温水プールなど、尊厳と豊かさに溢れた設計でした。

世代による福祉的支援のシームレス、地域とのシームレス、人とのシームレスを実現させるこの先進的な取り組みを、今後の文京区の福祉政策にぜひ反映させていきたいです。

子ども子育て委員会視察を終えて

高山 かずひろ 委員

この度の視察先として、渋谷区が指定管理事業者として委託している「社会福祉法人睦月会」が運営する「りばあさいど原宿」を訪問した。

この施設は児童発達支援として障害者それぞれの多様なライフステージの課題を、本人に合わせた活動を提供しながら将来の生活設計をご家族と共に考えていく訪問/通所型として支援事業をおこなっていた。

1～3歳では、あそびやリハビリを通して自分自身の身体を知ることや友人や支援者などの家族以外の他者との信頼関係構築を図っており、4～5歳では、訓練を通して気持ちの表現や伝え方に関する多くの経験を積みながら、就学を見据えて必要な力を伸ばすための支援を行い、また放課後等デイサービスにおいては本人の体調に合わせて訪問と通所を組み合わせた体制など、まさしく切れ目のない（Seamless）支援（Support）を構築して、地域の構成員としての役割づくりへの支援サポートは大変参考となった。

視察を終えて

田中 香澄 委員

渋谷区シームレスサポートラボ原宿を視察した。

法人の理念に「障がい者福祉は、障がい児者の療育、発達支援、生活支援の課題がそれぞれのライフステージで異なり、その課題をそのステージで解決し、次のステージへ持ち越さないことが重要。未就学期、学齢期、青年期、中年期、高齢期、それぞれのライフステージの切れ目のない支援「シームレスサポート」を目指す」としていた。

こういった事業運営が求められる一方で専門人材の確保や高い運営コストと採算性の課題、行政・制度上の壁、リスク管理等の要因から設置の難しさが指摘されている。そこに挑戦する法人に感銘を受けながら施設を見渡すとその理念実現に向けた想いの結晶がそこかしこに現れていた。

例えば、重症心身障がい児はベットの生活で天井を見ている時間が長いので、部屋ごとの天井に工夫を施していた。またプールのプログラムでは利用者が水に入ると表情もリラックスし開放される時間となっているという。

どんな重度の障害であっても当たり前な生活を描くことができそうだ。

今後も質の高い個別サービスの提供や入所施設不足については課題とされつつ、本区にとって地域福祉政策や子育て支援政策においても貴施設の取組みや運営の手法については積極的に参考にして参りたい。

「縦割り」と「切れ目」を解消する多機能連携拠点の必要性

沢田 けいじ 委員

本施設は、医療・福祉・教育の制度の「縦割り」を克服し、利用者のライフステージによる支援の「切れ目」をなくすために設立された統合支援拠点です。視察をとおり、この理念が事業モデルから施設構造、職員体制まで浸透しているうえ、構想段階から積み重ねてきた区や家族との連携の成果が、利用者からも職員からも選ばれる施設として結実している様子が確認できました。本事例から、以下3点の課題を文京区に提言します。

- ①障害種別や年齢で分断されがちな支援サービスを、利用者のニーズに応じて組み合わせられる多機能連携拠点の整備
- ②医療的ケア児の医療情報や支援計画を福祉事業所、医療機関、教育施設等が円滑に共有できる仕組みの構築
- ③利用者本位の柔軟なサービスを提供する事業者への持続可能な運営支援制度の構築および国や都への働きかけ

重度障がい児者も自分らしく生きられる支援

小林 れい子 委員

今回、視察をした「シームレスサポートラボ原宿」は、障がい児者を抱える家族の声をもとに、「地域での当たり前生活」を目指す施設をつくり、重度障がい（医療的ケアを含む）を受け入れている。療育、発達支援、生活支援の課題を次のステージに持ち越さず、切れ目のない支援を目指しているとのことで、不安の尽きない保護者の安心につながっている。

施設内には、動く範囲が限られる障がい児者が活用できるプール、ベットに寝た状態でもまぶしくない照明を使った天井、隣接する保育園と共用の園庭などがあり、地域の人たちとの交流にもなる1階カフェの運営では、就労支援に加えて工賃の向上も実現している。

まだ設立して1年の新しい施設であるが、重度障がいのある方が、支援を受ける側ではなく、地域で自分らしく生きられるようにするための支援に、将来への希望を感じた。

視察を終えて

金子 てるよし 委員

障害福祉の分野で「18歳の壁」の解消が焦眉の課題になり、国による新たな支援策の構築が求められている下で、未就学期、学齢期、青年期、中年期、高齢期と各ライフステージに応じて切れ目のない支援を1つの施設で提供していこうという果敢な取組に敬意を表したい。

とくに療育の専門職員について職員の欠員はなく、加配も行っているということでした。指定管理による運営であっても、これらケア労働者の人件費が確保される運営についても詳しく解明したいものです。

併設のカフェでは障害当事者が就労して月1万円位の収入とのことでした。カフェと言う業種から言ってやむを得ない面もあろうかと思いますが、労働の対価として更なる引き上げは政治の課題だと改めて認識したところです。

親無き後の高齢期にむけて住まい確保の課題は切実な課題になっているが、この点については理事長を中心にグループホームの立ち上げ方の学習会に取り組んでいると聞きました。こうした分野についても国や自治体の支援が一段と進むことが求められていると思いました。

支援のシームレスを目指して

白石 英行 委員

誰もが相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会を実現する事が求められている中、文京区は2005年に自治基本条例を定め、様々な対応を図ってきました。

渋谷区が指定管理委託している「シームレス サポート ラボ原宿」は、社会福祉法人 睦月会が運営しており、その理念と利用状況を視察させて頂きました。

児童発達支援ライズ、放課後ディスプレッド、生活介護インフィニティ、短期入所フレックス、機能訓練アドバンス、カフェD&I、クリニックBLISSを区有地活用で、特に車イス利用者の目線を大切に室内設計がされ、木材を多く使用することで居心地良さを演出しており、園庭も隣接保育園と利用し広々とした環境が構築されていた。特に4F設置のプール設置などは身体回復を見込んだ施策は素晴らしい。今後は、グループホーム設置に向けた検討が先進的に行われる事を期待しています。

視察を終えて

松平 雄一郎 委員

渋谷区りばあさいど原宿を訪問した。広いフロアを有する 5 階建ての施設内には、さまざまな年齢層に対応した複数の障がい者福祉事業所が集約されており、障がい児者のそれぞれのライフステージに応じた切れ目のない支援が実現されていると感じた。

プールでのウォータープログラムや音楽療法など、多くの次世代型の専門療育を導入している点も大変興味深く感じた。また、1 階にカフェが併設され、事業者と保護者、また保護者同士が交流できる場や、相談室も充実しており、利用者である障がい児者の将来の生活設計を、家族と共に考え、その声をさらなるサービスの充実に反映させていこうとする指定管理者の前向きな姿勢を感じ取る事ができた。

本区においても、それぞれの年代に合わせた事業所が十分に確保されているとは言えず、また地域分散している課題もあり、今回の渋谷区の事例は大変参考になったと感じている。視察を快く受け入れて下さった社会福祉法人睦月会の皆さまに、心から感謝を申し上げたい。

視察を終えて

名取 顕一 委員

原宿駅から 10 分という立地にあるシームレスサポートラボ原宿を訪問し、そこで行われている知的・身体障がい児・者への切れ目のない支援を見てきた。そこではまさに乳幼児期から高齢期までのそれぞれの障がいにあった支援をおこなっており、きめ細かい対応をされていることを確認した。特に 4 階にあるプールでの機能維持、回復メニュー、音楽療法スヌーズレンの部屋、1 階にはカフェを併設し、利用者の社会復帰の訓練も兼ねており、一般客も利用できるシステムとなっている。ひとつの施設の中で、ここまで充実している施設はなかなかないと実感した。運営している社会福祉法人が、当初計画から関わっており、結果としてその法人の理念が形になっていると感じた。文京区でも計画当初より、民間の力をお借りして、より良い施設、運営をこれからも目指して欲しい。

子ども、子育て委員会の視察を終えて

関川 けさ子 委員

昨年の12月19日、「シームレス サポート ラボ 原宿」を、子ども子育て委員会で視察した。

この施設は、渋谷区が建設し、社会福祉法人睦月会が委託を受け、児童発達支援、放課後デイ、短期入所等、乳幼児から老年期までシームレスな支援を行うということを理念に運営している施設とのことで、初めて見学しました。

スヌーズレン・プールでのウォータープログラムでは、アンビューバックを使いながらの水中訓練等、常に新しいことへ挑戦する法人の意欲を感じました。

また、大田、江東、国立、三鷹、西東京エリア等、広く事業を展開されている睦月会の運営に感心しました。ただ残念だったのは、一つの事業の受け入れ人数が少なく、また、待機している障害者、見の方の人数の把握ができていないことでした。そのようにカウントしなくてもよい仕組みかもしれませんが、待機している方が、一人でも多くこのような施設を利用できることが、大切だと思いました。